

# 視点

## 災害大国日本に暮らす きこえない人々

刻々と状況が変わる災害の情報は、ほとんどが音声で発信されている。文字や手話言語の視覚的な情報しか得ることのできないきこえない私たちは、こんな時どうすればいいのかといつも不安を抱えている。

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 唯藤節子

### 3.11のとき私は

2011年3月11日14時46分に突然大きな横揺れが長時間続き、「これは今までの地震とは違う」と漠然とした不安を感じながら、私は浅草橋の東京都盲ろう者支援センターにいた。情報がきちんと得られるのだろうかという不安が脳裏をかすめると同時に「盲ろう者（目と耳に障害を併せもつ人）の支援はどうなるんだろう」、「自分の事もおぼつかないのに支援なんて」と様々な思いが去来した。

テレビのニュース画面では、これまでに観たことがない黒い波がじわりじわりと陸に向かっていく。その様相は理解を超え、何が起きているのかさえわからなかった。

センターで行われていた研修はすぐさま中止になり、参加していた盲ろう者は介助者とともに帰った。私は、センター事務所で地図をプリントアウトしてもらい、帰宅する方向が同じ人と一緒に歩き始めた。

道すがら交番やお店の人に何か情報を聞き出そうとしている人たちがいたが、きこえない私たちは、状況がつかめなまま数時間歩き続けた。途中、近くの駅で電車が動き始める気配があり、多くの人は駅員さんに聞いていたが、すぐには動かないように見えたのであきらめて歩き通し、5時間後にやっと自宅にたどり着いた。

### 必要な情報が入らない

東京でも停電があったが、幸いにも私の住む



地域ではテレビを観ることができ、震災に関わる情報を知ることができた。

ところが、群馬のきこえない知人は4日間停電だったため、何が起きたかわからなかった。5日目にやっと電気がつき、テレビで津波の被害や原子力発電所の惨事を知った。「ラジオで情報がわかれば」と言っていたが、これは山奥での話しではなく、街中での出来事である。

刻々と状況が変わる災害の情報は、ほとんどが音声で発信されている。文字や手話言語の視覚的な情報しか得ることのできないきこえない私たちは、こんな時どうすればいいのかといつも不安を抱えている。

### 避難所でもまた一人ぼっち

避難指示が出た時や災害が起きた時にきこえる人は安心を得るために、避難所に行くが、きこえない私たちは、避難所でも不安な気持ちを払拭できない。

なぜなら、まわりの人とコミュニケーションがとれず、支援物資の配布のお知らせや放送がきこえず、テレビの緊急番組を観ても手話通訳がないために正確な内容はわからない。

何が起きているのか常に周囲の様子を伺い、推測しなければならず、緊張を解くことができない。他の人と気軽にコミュニケーションをとれるわけでもなく、孤独となるためである。

### 台風による水害への不安

2019年10月、私の住まい近くの多摩川堤防が台風で決壊した。水害の避難対象区域が徐々に広がる中、携帯には「避難せず様子を見てください」「避難所の案内」などさまざまな情報が次から次へと入ってくる。情報が溢れ、必要な情報を取捨選択できない状況におかれ、どの情報を信じ、どう判断したらいいのか、誰に聞けばいいのか、避難すべきか否かとても不安な一夜を過ごした。





きこえない人の願いを結集する全国ろうあ者大会

### 3.11 きこえない人の高い死亡率

東日本大震災では、地震による大津波が家や車や人々を飲み込み、亡くなった人や行方不明になった人は約18,000人を超えた。

なかでも、障害のある人の死亡率は障害のない人の約2倍となった(NHKハートネット「東日本大震災時データ(障害者の死亡率)」)。

障害者では、目の見えない人の死亡率が一番高く、きこえない人の死亡率は驚くことに2番目であった。これは、津波の音や防災無線、避難を呼びかける声がきこえず逃げ遅れたことが大きな原因だったと思われる。

私の住む世田谷には障害者グループホームがあり、文字での理解は難しいが手話言語なら理解できるきこえない人が入居している。台風襲来の前日から電車が計画運休したり、勤め先も臨時休業となったりしたが、入居者はテレビを観ても何故このようになっていのか理解できず、手話言語で説明してはじめて理解していた。

### きこえない人が困ること

きこえない私たちは、まわりの人の音や声がき

こえない、話しかけられていることや緊急放送が流れていることに気づかないことが多くある。

また手話言語を使う私たちは、まわりに手話言語ができる人がいないと誰とも話せず、孤立してしまうことがある。

メガネをつければ、ものがはっきりと見えるのとは違い、補聴器や人工内耳をつけても相手の声ははっきりときこえるわけではない。

きこえの程度や音を感じる状態が人それぞれ違うため、補聴器できこえやすくなる人もいれば、音はきこえるが何を言っているのかわからない人や全くきこえない人もいる。

そのため、きこえない人が必要とする支援やコミュニケーションは一人ひとり違うので、どの方法が良いか本人に確認することが重要になる。

### コロナが招いた新たなバリア

2020年に新型コロナウイルス感染症が世界各国に広がり、東京オリンピック・パラリンピックも延期となった。感染を防ぐため、マスクの着用、手指の消毒、人と人の距離確保、テレワークや外出自粛など、私たちの生活は大きく変わった。

きこえない人は相手がマスクを着けているとコミュニケーションが取りづらくなり困っている

ことが新聞やSNS等で報じられ、きこえない人にとって、相手の表情や口の形を読み取ることがコミュニケーション上とても重要なのだと多くのの人々に知ってもらえた。

しかし、困ることはそれだけではない。新型コロナウイルス感染症関連の相談窓口が各所に開設されているが、その多くは電話のため、電話ができないきこえない人は、相談できる所が限られてしまう。

政府や自治体からのコロナ情報がテレビや記者会見で発信されているが、「文字だけではなく手話言語で内容を知りたい」、「命に関わる情報を自分たちのことばで受け取りたい」という要望により、全都道府県知事の会見に手話通訳が立つようになった。

なお、2021年7月から公的インフラとして、「電話リレーサービス」が始まり、きこえない私たちが電話ができるようになる。このような情報バリアフリーの広がりはとても嬉しい。

### 新しい生活様式と情報保障

きこえない私たちは手話通訳者が入ることでスムーズな意思疎通が可能となる。

しかし、コロナ禍において、対面での手話通訳が困難になり、今、全国各地でスマートフォンやタブレットを活用した「遠隔手話通訳」が導入されている。

遠隔手話通訳は医療場面などの「新しい生活様式」での通訳のみならず、手話通訳者の派遣が困難な離島や山あい、そして災害の際にも大きな助けになるだろう。

世界の中でも地震や台風が多く災害大国である日本において、新たなIT技術を活用したこれらの支援もさらに広がることで、きこえる人と同じような環境が得られることになり、私たちの命をも守ってくれると考えている。

### きこえない人への災害支援

- きこえない人が使うコミュニケーション手段に合わせる
- 文字や絵等の視覚的手段で情報を伝える

### 『手話言語』

障害がある子どもたちや大人たちの権利を守る国連障害者権利条約の中で、手話言語は英語やフランス語のように言語の一つであると定義された。

世界各国で使われている言語がそれぞれ違うように、手話言語も各国でそれぞれ違う。

- 専門用語は避け、わかりやすい箇条書きにする
- 何が起きたのかわからず、不安そうに周りの様子を見ている人がいたら、身振りや筆談などで声をかけてみる
- 避難の声かけ、避難誘導する
- 避難所受付では、障害のある人には、支援してほしい内容を確認する
- 避難所では、支援物資の配給や大切なお知らせは、人目につきやすいところに貼紙をする
- 避難所のテレビは、字幕設定をONにするほか、きこえない人向けの「目で聴くテレビ」を受信できる「アイ・ドラゴン4」をつないでくと、きこえない人も安心して過ごすことができる

### 最後に

災害時や緊急事態に直面した際、真っ先に被害を受け、支援が届きにくくなるのは「社会的弱者」である障害者や高齢者だ。

私たちはこれまできこえない仲間が誰一人として社会に取り残されないことを目標とし、それを実行する取り組みを続けているが、障害者差別解消法にもある「全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現」のため「手話言語法<sup>※1</sup>」や「障害者情報アクセス・コミュニケーション保障法<sup>※2</sup>」の実現を目指し、今後も活動を続けていきたい。

※1 手話言語法：

手話言語で生活できるようにする。

※2 障害者情報アクセス・コミュニケーション保障法：

きこえない人の情報アクセスやコミュニケーション手段を整備する。